

魔法騎士冒険譚ルチエリールタ

【第12話】

みなぎし
すい

【人物一覧表】

ルチェリールタ：騎士団長

チビィ：魔族

シャーザベスラ：ヌノ皇女

シャーニューニダ：ムジート族

ニユンリン：混血魔族

嵐宮芽里：夕杜王女

浮世心愛：五龍

アルノ・ヨナ：ポストゼランガロニア

王女

ワウー：犬

フィル：アルデスナ王子

リチャクラオン：アルデスナ国王

タールク：宵闇騎士

オパピア：社長令嬢

ヒュール：情報屋

ゲドーナ：ゲドン族首領

ユイシャ（20）：ラフドナ騎士

マウ：ゼットシグマ教祖

エリシア・ローズ……？

ライネ……サキュバス族

ゾール……アラクネ族

ヴァラン……ムジート族

○ゼラン王都・祭典会場（朝）

民衆が騒いで逃げ惑っている。

ルチェリールタ「みんなこっち！」

ニユンリン「こっちへ！」

ルチェリールタ、ニユンリン、チビィ、

シャーニューニダ、浮世心愛、避難誘

導している。ワウーは心愛に抱っこさ

れている。

シローリ「なんでバレた……」

リチャクラオン「な、これはどういうことだ

！」

シローリ、ヒュールに変化。

ルチェリールタ「偽物……変装の魔法か！」

ニユンリン「あの風呂で会ったシローリが偽

物ってこと？」

ルチェリールタ「たぶんそういうこと！」

エリシア、自分の変装をはがしゲドー

ナの姿に。

ヒュール、懐に入っているボタンを押

して飛び去る。

○プリマダンケ城下町・住宅街（朝）

突然、機械が暴走を始める。

タールク「これは！」

タールク、剣を抜いて素早く機械を斬り伏せていく。

オパピア「タールク！ 何が起こってるの？」

タールク「4カ月前の機械暴走事件と同じことだろう！」

オパピア「そんな！ 前はやっとの思いで火消しできたのに、また暴走なんてしたら：

：パパが積み上げてきた全部が」

オパピア、顔面蒼白になる。

オパピア「パパは、ずっとみんなのことを思っ
て機械開発してたのに！」

タールク「せっかく決闘人をやめたんだ。オ
パピアのことは、死んでも守る！」

オパピア「死なないで！」

○ゼラン王都・祭典会場（朝）

ヒュールに向かうアルノ・ヨナの氷攻撃を防ぐゲドーナ。

フィル「父さん、こっちだ」

フィル、リチャクラオンを避難させる。

ヨナ「強すぎるのヨナ」

シャーザベスラ「ロンリーシャークッ！」

ゲドーナ「はあっ！」

ゲドーナ、水の鯨攻撃を氷魔法で迎撃。

水の鯨が一瞬で凍らされてしまう。

シャーザベスラ「ちいつ！ 君、ゲドン族の

首領だろ？」

ゲドーナ「へえ、わかるの？」

シャーザベスラ「そんなに強かったらね」

嵐宮芽里「あなたは、情報屋ヒュールに情報をもらっていた」

ゲドーナ「バレてたのね」

向かい合う2つの勢力。フィルがステージに戻ってくる。

避難誘導がほぼ完了し、ルチェリール
タ、ニウンリン、シャーニューニダ、

チビイが戻ってくる。

芽里「なるほどその強さ……レドニクスから力をもらったというわけですか」

ゲドーナ「ふ、レドニクスはこの地の人間、世界を全て破壊するつもりよ。私たちゲドン族にとっては都合がいい、だから協力した……王の子たちが集ってかなり面倒なところになったわね」

ゲドーナ、ニヤリと笑う。

ゲドーナ「私は、邪神を完全なる存在にするためにここに来た。そうすればこの地の人間と魔族をすべて破壊できると……私たちの住処を侵略してきた人間どもを皆殺しにするために！」

ゲドーナ、怒りの表情になる。

それを聞き、ルチェリールタ、顔をギリつとゆがめる。

ルチェリールタ「ふざけるな！ 私たちはお前たちに侵略されたんだ！ パパとママはお前らに殺された！ だから闘うしか

なかった！ それを人間のせいにするなゲドン族！」

ルチェリールタ、激怒して炎、水、氷、雷魔法を同時に発動。

ゲドーナ、それを余裕の表情で受け止める。

芽里「はっ」

芽里、シャーザベスラの方を向く。

芽里「まずいです！ こいつ私たちのことはあまりよく知らないようですが、邪神のことを知っています！」

シャーザベスラ「まさか！」

シャーザベスラ、遠くのルチェリールタたちを見て、

シャーザベスラ「危ない！」

と、ルチェリールタたちに向かって叫ぶ。

ゲドーナのエネルギー弾がチビイに向かう。爆音が鳴り響き、大爆発が起くる。

煙が晴れる。

心愛「やれやれ、危ないのう。チビイは芽里のお気にじゃから守るよう言われておったんじゃ。危ないではないか」

ワウーを抱っこしながら言い放つ。

○（回想）神依学園・廊下（朝）

芽里「心愛」

芽里、ペンを取り出し紙に何か書く。

心愛の肩をちよんと触る。

紙を見せる。

心愛「なんと、そうじゃったのか？　それは
丁重に扱わなければならんのう」

小声で会話する2人。

（回想終わり）

○ゼラン王都・祭典（朝）

シヤーニューニダ「レドニクスと邪神が世界の滅亡を目論んでいて、将来英雄になるであろぅルチェリールタを狙っているという

わけか。我は兄に会うんでな、世界の滅亡は止めさせてもらうぞ」

ニユンリン「あーしの大切なルチェリールタは……絶対渡さない！　ルチェリールタはあーしが守る！」

ルチェリールタとチビィ、ワウーを守るように立ちふさがる4人。ニユンリン、ルチェリールタにそつと抱きつく。

ルチェリールタ「みんな……」

ゲドーナ「全員でかかってくるってわけね。

ちっ……ああもう！　いったいなにがあったらこうなるわけ？」

ゲドーナ、イライラした様子で手の爪を噛む。

ルチェリールタ「はあっ！」

ルチェリールタ、ゲドーナに向かって飛び、5つの属性魔法をまとった剣を振り下ろす。ゲドーナ、それを受け止める。

ゲドーナ「炎、水、氷、土、雷……5つの属

性魔法を？　こんな最強の騎士……ちいつ。
これがレドニクスに対抗する英雄ってわけ」
ルチェリールタ「それでも！　私は最強じゃない！」

ニユンリン「はあっ！」

ニユンリン、ゲドーナに向かって両手をかざす。

ニユンリン「く、魅了が効かない！　恨みの感情が強すぎる！」

シャーニューニダ「くらえ」

シャーニューニダ、魔法を発動。ゲドーナ、防ぐ。

心愛「天邪鬼、音沙汰、綺羅星の約束……」

心愛が詠唱すると、ゲドーナの周りに雷のエネルギーが出現。

心愛「『崩壊する集積（カンジェンガンジ）』」

ゲドーナに向かって雷が迸る。

ゲドーナ「鬱陶しい！」

ゲドーナ、全方位にエネルギーを放つ。

ルチェリールタ「がっ！」

ルチェリールタ、ゲドーナにふつとば

され、壁に激突。

ゲドーナ「もう！ 数が多い！」

そう言い残し、空に向かって飛んでいく。

ルチェリールタ「くそ！ 逃げられた！ あ

いっだけは……パパとママを奪ったゲドン

族だけは絶対に許さない！」

ルチェリールタ、憎悪と怒りで顔をゆがめる。

○ゼラン城・王座の間

一行、王座に座っているリチャクラオンを見ている。ワウーは心愛に抱っこされている。

リチャクラオン「お前たちのおかげで、国民は守られた。感謝する」

ファイル「父さん。翔龍祭は開催するの か？」
リチャクラオン「開催する。これでやめてし

まっでは、国民に不安を与えることになる。
幸い、この人たちがいるから警備にあたっ
てもらおうと思う」

ファイル「つてことだけど、お前たちどうする
？」

ルチェリールタ「もちろん、引き受けさせて
いただきます」

○ローゼル社・エントランス

報道陣がエントランスに押し寄せてい
る。

記者A「どういことですか！　ご説明をお
願います！」

大勢の記者と社員が、せめぎあってい
る。

オパピア「みなさん聞いてください！　4カ
月前の事件の時だって、あたしたちが原因
じゃないって証明されたじゃないですか！」

記者B「ですが、2度も暴走させていては信
用問題ですよ！」

オパピア「そんな……」

○ローゼル社・社長室

オパピア「だめだ……国が傾いちゃう……」

オパピア、頭を抱える。

○ホテル・個室（夜）

一行、ホテルで作戦会議中。

芽里「あれは強かった。ルチェリールタさんを恐れているような発言をしていましたが、ルチェリールタさんよりもはるかに強い。これが、レドニクスのかみですか。力のかみ一端でしたが、目の当たりにして恐怖を覚えませんでした」

ルチェリールタ「そんな」

シャーニューニダ「それにあの口ぶり、レド

ニクスと邪神を完全に別にとらえていた。

我はそれらを知らないからなんとも言えないが、相当やっかいだぞ」

ルチェリールタ「それに、レドニクスが生み

出した？ あの、夕杜で闘った魔族……か
つて、国を滅ぼしたとされる大魔族ソガメ
ーナ、レオシーナ、ナニダーナ。倒された
って聞いてたけど、まさかそれを復活させ
るなんて」

チビィ「え、あの時そんなやつと闘ってたの
か？ あの黒いドームが？」

芽里「いえ、あれは私です」

チビィ「そうか」

フィル「そうだ、こんなものを拾ったんだが」

フィル、懷から青いマナライトを取り
出す。

ルチェリールタ「あ！ それ」

ルチェリールタ、フィルに続いて青い
マナライトを取り出す。

合計4つのマナライト。

フィル「知り合いの学者に分析させたんだが、
これはゲドン族に対抗しうる可能性がある
らしい」

ルチェリールタ「同じです。正確には、たま

たまこのかけらがゲドン族を消しただけで
すが」

芽里「ふむ。これ、形が合いませんか」

ルチェリールタ「え」

ルチェリールタ、4つのマナライトの

割れた断面をくつつける。

ルチェリールタ「なんか、あと1個はまりそ
う」

シャーニューニダ「我らは1国で1つずつ見
つけてきた。だとすると」

ヨナ「残りは、カルナコマリにあるってこと
なのヨナ。たぶん」

芽里「では、それを探す旅に向かいましょう。

あのゲドン族は強かった。かならず、策を
万全にしてから挑む必要があります」

シャーザベスラ「話まとまったか……ふわあ。

もう寝ようぜ。チビイ、邪魔しちや悪いか
ら僕が抱っこしてやる」

シャーザベスラ、チビイを抱っこする。

心愛「あっちは、あんまり見てやるでないぞ。

いつ死んでしまうからもわからぬ状況にな
ってきたから、後悔したくないんじゃないだろう」

シャーニューニダ「ならなんでみながいると
ころ……はあ。まあいい、好きにしろ。も
し、一時的にルチェリールタがダウンして
も我らがなんとかするさ」

ルチェリールタ「はは、ダウンって。それを
そんな表現する人いないよ」

シャーニューニダ「人？ 何言ってる、我は
魔族だ」

ルチェリールタ「もしかして、天然？ 今ま
で気づかなかったけど」

チビイ「心開いて素を出したってことだな！」

チビイ、シャーニューニダの頭に乗る。

シャーザベスラ「なあ女子のみんな」

シャーザベスラの言葉に、一同振り向
く。

シャーザベスラ「なんでおっぱい大きいんだ
？ みんなおっぱい大きい！ けど、僕だ
ってモテるもんっ！」

シャーザベスラ、涙目でむくれる。

芽里「ぷっ…」

芽里、吹き出す。

芽里「ほんと、可愛いですね…ふふ」

シャーザベスラ「笑うなよ！ 芽里なら身体的特徴も笑うなっていうだろ！？」

芽里「いえ、友人がかわいい反応するものですから…ふふっ！ 決して、貧乳を笑っていませんから安心してください。あなたがかわいいからです」

シャーザベスラ「ちっぱいって言うなあ！」

シャーザベスラ、涙目。叫び声が部屋に響き渡る。

芽里「お2人とも、もしものことがあってもなんとかしますから。安心してくださいね」

芽里、部屋の明かりを小さくする。

それぞれ寝る準備をする。

ルチェリールタとニユンリン、ベッドの布団に潜る。

ルチェリールタ「ん、ん、あっ、あんっ」

ニユンリン「あ、あっ、あんっ、あっ、んん
っ！」

ベッドがギシギシと音を立てる。パン
パンと体が打ちつけられる音が鳴る。

布団の中で、ニユンリンが腰をへこへ
こさせている。

ルチェリールタ「ああっ！ あんっ！ あん
んっ！ イク！ イクうっ！ イツグ！」
ニユンリン「みんな寝たし、布団いらないよ
ね」

2人、布団から出る。
ルチェリールタ、四つん這いのまま挿
入される。

ニユンリン「あんっ！ イクっ…あっ！」
ニユンリン、腰をびくつと震わせる。
ルチェリールタの陰部から、精液が溢
れる。

ルチェリールタ「あ、いっぱい中に…」
ニユンリン「えい」

ルチェリールタ、ニユンリンに陰部を

指で弾かれ、

ルチェリールタ「ひああああんんんッ！」

腰をビクビク震わせる。精液が飛び散る。

ルチェリールタ「ふわあ」

あくびする。

ルチェリールタ「寝よ」

ニュンリン「抱きついていい？」

ルチェリールタ「いいよ」

2人、布団に潜って抱き合う。

○マルキュ神殿・最奥（夜）

人間と魔族たちが、ベッドに仰向けになつて意識不明のエリシア・ローズを見て、大きな声をあげる。

マウ「あははは！ そうだ、もっと眠り姫エリシアを崇めたてまつれ！」

マウ、群衆に向かって叫ぶ。

メンバーA「教祖様」

マウ「なんだ」

メンバーA「前教祖様は見つかったのですか」

マウ「見つけたと思って接触を試みたが、人違いと言われてしまつてな」

メンバーA「そうですか」

マウ「まあ、人違いならいい。『死神のナイトメア』を続けるだけだ。心さえ破壊してしまえば、無気力な腑抜けになるだけだ。そして、今は行方不明だが……ゼラムが望んだ混沌が、レドニクスと邪神によつてもたらされる！ あははは、ははははははははは！」

マウ、狂気の笑い。

メンバーB「まるでゼラムそっくりですね、マウ様」

○（夢）森・魔族の住処

ルチェリールタ「ん……？」

ルチェリールタ、目を覚まし手元を見る。

ルチェリールタ「夢……？ でも、妙にリア

ル」

ユイシャ（20）「ルチェリールタさん！」

ルチェリールタ「え、ユイシャ？　なんで、生きてるの」

ユイシャ「ずっと憧れでした！　なのに……どうじでみずでだんですが」

ユイシャの頭や体から、血が流れる。
ルチェリールタ「あ、ちが、みすててなんか
ない……ユイシャが、ユイシャがかばって
くれて」

ルチェリールタ、声が震えている。

ユイシャ「なんで、なんで見捨てたの」

ルチェリールタ「だって、敵が来て、ユイシ
ヤが」

ルチェリールタM「そうだ。私は騎士団長に
なる前、全能感からくる不注意でユイシャ
を死なせちゃったんだ。それで、もう二度
とそんなことは起こさないって誓った。な
のに、なんでそのユイシャがここに？」

ユイシャ、ルチェリールタに迫り、

ユイシャ「なんで見捨てたの！」

悲痛の叫びをあげる。

ルチェリールタ「あ……ああ、ああああ！」

○（夢）遺跡地下・通路

ニユンリン「え」

ニユンリンの目の前に、ライネとゾールが立っている。

ニユンリン「パパ、ママ」

ライネ「ニユンリン」

ゾール「ニユンリン」

ニユンリン「パパ、ママ。会いたかった」

ニユンリン、目に涙を浮かべて両親に
駆け寄る。

ニユンリン「わああああん！　パパ！　ママ

！」

大声をあげて嬉し泣きするニユンリン。

ライネ「ねえ、なんで私たち死んだの」

ゾール「そうだ、なんで俺たちは死んだんだ？」

ニユンリン「パパ、ママ、何か変だよ？」

ニユンリン、首をかしげる。

ライネ「ニユンリンのせいよ」

ゾール「そうだ、ニユンリンのせいだ」

ニユンリン「え、なんで。なんで？　パパもママも、守ってくれて」

ライネ「あんたなんか守ったことが心底悔やまれるわ」

ゾール「ほんとだ。一族の使命すら全うできない雑魚魔族が」

ニユンリン「2人ともおかしいよ……」

ニユンリン、両親に怖い顔を向けられてふるふる震える。

ライネ「死んで」

ゾール「死ね」

ニユンリン「い、いや、いや、いやああああああああ！」

○（夢）シャーニューニダ宅（夜）

シャーニューニダ「ここは……家？」

シャーニューニダの兄ヴァラン、何かの機械を作っている。

シャーニューニダ、兄の姿を見つける。

シャーニューニダ「兄さん？ 兄さんなのか？」

ヴァラン「なんだ」

シャーニューニダ「……いや、いい。兄さんがいれば」

ヴァラン「なんだよ、しけた面してんな。もう遅いから寝とけ。魔族でも寝れば体力回復するからな」

ヴァラン、少し笑う。

シャーニューニダ「ははっ」

シャーニューニダの厳格な表情がほころぶ。